東海新報（平成２１年１月２５日）

東海新報
発行所
㈱東海新報社
〒982-0012 大船渡市大船渡町字館ヶ下1
電話番号 0192-27-1000代
ファクシミリ 0192-27-2154
振替口座 02300-9-183
㈱東海新報社
東海新報Web
http://www.tokaishimpo.com/

観光の充実へ　教材は気仙

「旅のもてなしプロデューサー」を目指して真剣な表情を見せる受講生＝陸前高田ドライビングスクール

「旅のもてなし研修」開講

県内外から受講生集まる

「旅のもてなしプロデューサー養成講座」が二十四日から、陸前高田市竹駒町の陸前高田ドライビングスクールなどを会場に始まった。地域の良さを発信し、旅人を受け入れる人材を育成しようと企画され、県内外から約三十人が参加。気仙における観光資源を見つめ直しながら観光客誘致への新たなアイデアを探ろうと、受講生は熱心な表情を見せていた。

講座はNPO法人・全国生涯学習まちづくり協会、財団法人・日本余暇文化振興協会、聖徳大学生涯学習研究所、近畿日本ツーリストで構成する「旅のもてなしプロデューサー養成講座実行委員会」が主催。旅行の企画やまちづくりに関心のある人を対象に募集したところ、県内外から三十人近い受講生が集まった。

会場となった同スクールの教室内には大漁旗やとろ布が飾られ、受講生を歓迎。気仙スギによる名札も受講生らに配られた。

開会行事では、福留敏全国生涯学習まちづくり協会理事長が「これから全員で作りとげる講座。成果を日本中に広げたい」とあいさつ。気仙きらめき大学長でまちづくり協会ケセン地区支部長を務める田村満氏は「気仙のおもてなしを堪能していただきたい」と述べた。

受講生の自己紹介に続き、午前は「観光の現代的意義と観光まちづくり」と題して情報交換。同大学のアドバイザーを務める鈴木紳雄さんと、同大学の学生でまちづくりコーディネーターの新沼律子さんが説明役を務めた。

鈴木さんは現在約一千万人の外国人観光客を二千万人に増加させる国の方針を紹介。約六割が中国や韓国、台湾からの観光客を想定しており、東北の玄関口となる仙台空港から、気仙にどう呼び込むかを考える大切さを訴えた。

新沼さんは現代の旅には感動や体験、学び、交流といった複合的な要素が求められる傾向を指摘。そのうえで「口に出さないうちに旅行者の思いを察知して、素早く対応することが本当のおもてなし」と述べた。

二人は気仙における観光策として、金山史や三陸鉄道、地元海産物などの活用を提案。地元を発信するガイド育成や女性によるもてなしの充実によって、家族的な雰囲気や地産地消といった気仙の強みを観光につなげる重要性も強調した。

豊島裕理事長が「まちづくりと創年活動の意義」として講演。同大学の山口麗さんと佐藤優子さん、各種運営事業を展開する㈱三技協の渡辺治さんによる事例研究発表に続き、近畿日本ツーリストの福井普明さんが観光ガイドや旅のもてなしプロデューサーの役割などについて説明した。

ケセン語研究で知られる山浦玄嗣さんを招いた記念講演もあり、内容の濃い講座となった。受講生は熱心な表情で耳を傾け、気仙の魅力に理解を深めながら地域の自然、住民を活用した観光振興に意識を高めていた。

受講した長野県東御市教委職員の河野淳子さんは「東御市も長野県の中では過ごしやすく、気仙と似ている部分もあります。地域の良さを生かす取り組みを勉強したいと思っています」と話していた。

講座は二十五日まで。同日は気仙の街並みを歩いて巡る実習のほか、大船渡市大船渡町にある「寿楽荘」では、地域におけるもてなし手法について理解を深める演習などが予定されている。